



よみさんぽ

2018

Vol. 25

シリーズ 身近な生き物

見沼の鳥たち



写真家 野口勝宏

シリーズ 身近な生き物

見沼の鳥たち

語り 為貞 貞人さん
(さいたま市図書館友の会)



見沼田んぼはさいたま市に住む人にとって身近な自然ですが、斜面林が減ったり耕作放棄地が増えたり、随分変わったように思います。以前は見沼代用水の土手を歩いていると小さなヘビが逃げていくのや、ヒバリが空高く舞い上がっていくのが当たり前のように見られたものですが、ああした生き物たちは今どうしているのでしょうか。

そこで私が図書館在職中にお世話になった、さいたま市図書館友の会の為貞貞人さんに伺ってみることにしました。為貞さんは埼玉県生態系保護協会の会員で、東浦和図書館を拠点にボランティア活動をされています。職員の間では「野鳥の先生」として親しまれていました。

野鳥は暮らしの中の1つの風景だった

為貞さんは1932（昭和7）年広島県に生まれ、総評や公労協事務局、日本労働研究機構など、長く労働関係のお仕事をされてきました。ボランティア論にも精通していますが、実際に図書館や、埼玉協同病院でのボランティア活動（入院患者の洗濯や外来案内など）を長い間続けてこられました。

経歴を伺う限り、鳥とあまり関係はなさそうなのですが、どうして野鳥の観察を始めるようになったのですか。

——私は鳥の専門家でも研究者でもありません。大学の専攻も教育行政学だったくらいですから。ただ野鳥を見ることに言い知れぬ喜びを感じてきました。野鳥がいなくなったら「この世は闇」と思っている人は今も昔もたくさんいるのですが、私もその1人です。

子どもの頃、家の土間の梁に毎年ツバメが巣を作りました。春になると家族みんなでツバメの帰りを待ったものです。それが私と野鳥との親しい出会いの始まりでしょうか。小学校の頃は、田舎道で雁が列を作って飛んでいるのを見て「カギになれ、サオになれ」（童謡の一節）と叫んだのを思い出します。あの頃野鳥は庭先に降りてきたり空に飛んでいたたり、暮らしの中の1つの風景になっていました。今のように本で見るだけのものではありませんでした。

20代の終わりに上京し、1960年代頃からは労働運動の渦中にいました。そんな中でも「野山には鳥が鳴き、飛んでいる」と考えるだけで、生きる勇気が湧いてくるように思えたのです。その頃は春日部に住んでいましたから、休日の度に東武線で奥日光戦場ヶ原、利根川、渡良瀬遊水地に出かけました。谷津干潟や印旛沼にも行きました。仕事で中国やニューヨークへ行った時も、時間があれば双眼鏡を持って野鳥観察に歩き回ったものです。

1980（昭和55）年に大間木（現さいたま市緑区）に移り住みました。見沼田んぼに親しむようになったのはこの時からです。

見沼田んぼは「自然史博物館」

見沼田んぼとはどういう所なのでしょう。ずっと身近にあって、わかっているようなつもりになっていますが、本当はよくわかっていないのです。

——大宮台地の入り組んだ地形の低地部分にある「広大な緑地空間」と言ったらよいでしょうか。市街地の近くにありながら、田園風景や自然が残されている貴重な存在です。もともとたくさんの沼が点在する湿地帯でした。江戸時代の初期（1629年～）に治水と用水源の確保のため、南端に八丁堤という堤防を築いて水をせき止め見沼溜井ができました。徳川吉宗の時代になると（1727年～）、新田開発のためこの溜井を干拓して、利根川から新たな用水路がひかれました。溜井の代わりの用水路ということで見沼代用水なんです。こ



初夏の芝川第一調整池

の新田開発でできた約 1,200 町歩（ヘクタール）の田んぼが見沼田んぼです。

戦後は住宅や公共施設の造成，護岸工事，減反政策による休耕田の増加，斜面林の減少など，見沼田んぼの自然環境は大きく変わりました。国の特別天然記念物だった野田の鷺山の指定が解除されたのは，そのほんの一例です。

その一方で，見沼田んぼを守ろうという活動も広がり始めます。また芝川第一調節池の造成によって，ハクチョウなど水鳥の飛来も期待できるようになりました。見沼田んぼは，何度も人間の手によって変えられた自然環境に対応してきた，生き物たちの「自然史博物館」とも言えます。

為貞さんの印象に残っている見沼田んぼの鳥の話を聞かせてください。

——30 年以上前のことです。かすみ網にかかったモズを助けようとして軍手の上からいやというほど噛みつかれ，たいへん痛い思いをしたことがあります。1947（昭和 22）年にかすみ網の使用は禁止されていたのですが，密猟は絶えませんでした。当時は芝川沿いの木に「密猟禁止」という警告が結わえつけられていたほどです。

雨の見沼田んぼで傘をさして立ち続け，早苗の中に夏鳥のヒクイナを見つけた時は感激しました。ヒクイナは「キョッ キョッ キョッ」という鳴き声だんだん早口になり，急に調子を変えて終わります。昔から鳴き声が日本人を惹きつけてきた鳥です。見沼通船堀のあたりでは，シラコバトの「ポポーポウ」

というやさしい声を聞くこともできました。

同じく通船堀あたりで，上空に 30 羽ほどのサシバが上昇気流に乗って旋回する姿を見たことがあります。もう圧倒されました。10 月初旬でしたが，サシバは秋に伊良湖岬などに集まってから大群で南方に向かって渡ります。きっと見沼田んぼのあちこちにいたサシバが発源地に集結するため集まっていたところだったのでしょう。それから何年かは，その時期になると草の上



見沼通船堀のコサギ

に寝転がってサシバの群れを待ったものです。どれも 30 年以上前のことで，今は昔の思い出です。

変わったと言えば，私の観察した場所に最初にいたセグロセキレイやキセキレイが見られなくなり，今ではハクセキレイの縄張りになってしまいました。セグロセキレイは日本の固有種ですが，かつては冬鳥だったハクセキレイに追われ姿を消しています。

見沼の野鳥たち

私の家は北区で大宮公園の近くですが，30 年くらい前にはカッコウの声を聞くことができました。ウグイスの声はここ数年聞いていません。随分変わってきているんですね。ところで「見沼区の鳥」はカワセミですが，今も見沼で見ることはできるのでしょうか。

——さいたま市図書館友の会の東浦和支部では，2010（平成 22）年から 2012（平成 24）年にかけて，季節ごとに見沼田んぼの第一調節池あたりで野鳥や植物の観察会を行いました。東浦和図書館から見沼田んぼまでは歩いて 30 分くらいです。2012 年 12 月の観察会の時，芝川のほとりの小枝にカワセミをみつけました。背が青く光った美しい「生きた宝石」に息をのみ，参加者一同大喜びしました。身近な水辺でも，よく注意すれば観察できる鳥です。

2 年間の観察会ではどのような野鳥が観察されましたか。

——芝川第一調節池のあたりが中心ですが，カルガモ，コガモ，コサギ，ダイサギ，アオサギ，カワセミ，カワウ，オオバシ，カイツブリ，コチドリ，コゲラ，モズ，ホオジロ，オオジュリン，セッカ，チュウビ，ノスリ，ハヤブサ，オオハクチョウなど，37 種観察できました。

見沼たんぼで，ノスリやハヤブサのような猛禽類とか，ハクチョウが見られるなんて知



オオハクチョウのつがい（芝川第一調節池）

りませんでした。

——主に冬季ですが、オオタカ、チュウヒ、チョウゲンボウ、ノスリ、ハヤブサなどのワシタカ類を見ることができます。この冬はミサゴが飛来し調節池の魚を捕えて飛び上がりました。草原や調節池の上をノスリやチュウヒが低く飛び、オオタカやチョウゲンボウが



見沼田んぼのツグミ

高く舞い、高圧線の鉄塔からハヤブサがあたりを見下ろすというような光景には、また特別な高揚感を覚えます。見沼田んぼの豊かな自然が保たれ、回復していることが実感できる瞬間です。

観察会で3羽のオオハクチョウに出会った時は皆大感激でした。保全のための活動や調節池など生態系に配慮した試みによって、減少していたカモ、シギ、チドリ、クイナなど水鳥たちが戻ってくるのも楽しみです。

「鳥の観察は“いのち”のすばらしさ、いとおしさを気づかせ、その“いのち”に手をさしのべる勇気を与えてくれるもの」という為貞さんの考え方には、すべての生あるものへの愛が感じられました。野鳥たちがもっと見沼田んぼに戻ってくることを期待したいと思います。

(記 並木せつ子)

写真提供：為貞貞人さん

本に学ぶ生き物

並木せつ子



今号の特集でご協力いただいた為貞貞人さんは『鳥の目』（ライブラリー・アド・サービス、2017年）という著書を出されています。この本の「あとがき」に、＜野鳥観察の楽しさは申すまでもありませんが、実際に鳥と触れ合わなくても、本の中で鳥と出会い、鳥がさえずり、自由に羽ばたく美しい自然を想像することは十分に楽しいことです＞とありますが、その言葉通り「鳥」と「本」がぎっしり詰まった本です。

身近なスズメやカラスから、大空を舞うガンやイヌワシまでいろいろな鳥の生態や、鳴き声と聞きなし、渡りの不思議、鳥の絵を描いてきた人など、為貞さんの興味は広く深く尽きることがありません。

なかでも人間の手によって絶滅、または絶滅寸前まで追い込まれた鳥への思いは、とりわけ強く感じられます。北アメリカの広大な落葉樹林に生息していたリョコウバトは、1810年頃、22億万羽以上いたということですが、ブタのエサとして大量に殺戮され、1914年に絶滅しました。わずか100年の間に地球上から消されてしまったのです。

日本のアホウドリの受難にも触れています。鳥島など南海の孤島に漂着した人々によって存在を知られたアホウドリは、1887（明治20）年頃から羽毛採取のため密かな補殺がくりかえされました。地面が埋もれるほどいたアホウドリは40年で激減し、戦後の一時期には絶滅したとさえ言われていました。また無人島開拓という美名のもとに、補殺作業員として集められた出稼ぎ労働者は、過酷な労働を強いられ多くの人が命を落としました。アホウドリの受難は、出稼ぎ労働者たちの＜苦難の道と重なり、日本近代史の隠された一面を告発するものだ＞と為貞さんは言います。

今、アホウドリは研究者たちの努力により徐々に回復しつつあるということです。鳥やそれを取りまく自然を、壊すも守るも人間の考え方次第で、及ばず影響は大きく変わると改めて思いました。

この本は市販されていませんが、さいたま市の図書館で借りられます。

あの街 この街 俊一郎が行く・19

マンションとペット

念願かなって

こんにちは。いろいろとありましたが、犬2匹と暮らし始めました。家具や衣類を壊されたり、病気をしたり怒らせたりして手こずっていますが、言葉の通じない相手の気持ちを推測しながら過ごす日々は、刺激的です。

マンションでペットを飼うために

およそ半月前の週末に、マンションの総会がありました。たまたま議長を務めていた私は、他の意見が出きったタイミングで意を決し、資料を配布して説明を始めました。マンションでペットを飼えるようにするための「ペット規約」のことです。3回目の正直、これでダメなら諦めようと、他のマンション規約の事例を取り寄せて修正し、ペットの飼育に理解のある住民とも意見交換を行って入念に準備した「ペット規約」でした。

規約をまとめる作業は、建築の設計をする自分にとって、仕事にも活用できそうな有意義な調査となりました。まず、飼育できるペットの定義が難しい。多種多様な生き物を輸入することも可能な時代だけに、特定外来生物の飼育禁止はもちろん、ペット間のトラブルを考えた場合、猛禽類などをはじめとした肉食の生き物は制限が必要となります。また、マンションの場合、ペットを連れて共用部分を通過することになるので、その場合のマナーも、ペットの種類に応じて想定する必要がありました。ペットと言えば犬と猫とハムスターぐらいしか想像していなかったもので、いろいろと勉強が必要でした。

そうして多角的に考え抜いた「ペット規約」だったので、議案にかける時も不安はありませんでした。

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



質疑にて

「いかがでしょうか」一通り資料の説明を行った後、意見を待ちます。特に発言する人もなく、静かな時間が過ぎ、そろそろ採決しようとしたその時、1人から意見が出ました。

「野良猫にマンションの敷地内で餌をやっている人がいるので、やめてほしい」との声、一瞬たじろぎました。「ペット規約」では、共用部分でペットに餌付けすることを禁止しています。野良猫に餌付けし、大切に见守っている住民が複数いることは知っていました。その行為自体は特に迷惑に感じていなかったもので、見て見ぬ振りをしていたのです。しかし、ペット条項と矛盾してしまいます。

野良の小屋

私自身は、ペットを飼育できるようになれば、誰かがその猫を迎え入れるものだと思っていました。しかし、餌付けをしている人に聞いてみても、訳があってできないらしい。野良猫はたくましいので、うちのマンションで餌付けしなくても他で食べるからと、理不尽に思いつつも説得しますが聞いてくれません。仕方なくマンション裏の敷地外の河川敷部分での餌やりを進めましたが、雨が降かからない駐輪場で餌やりできるのが、具合がいいらしい。仕方がないので、その河川敷部分に小屋を置くことを見て見ぬ振りすることで話は決着し、晴れてペットを飼えることになりました。

歯切れの悪い話になりましたが、唯一の救いは、後日見かけたその野良猫がコロコロに太っていたことです。



あなたの街のやどかりさん

第22回

1つ1つのものに心を込めて

商品は障害のある人と社会をつなぐ結び目

すてあーずは、公益社団法人やどかりの里にある障害のある人が働く場の1つです。バス通りに面した黄色の2階建ての建物で活動しているすてあーずは、1階でリサイクルショップを運営し、自分たちができる3R（リデュース・リユース・リサイクル）を考え、取り組んでいます。2階では革や布を使った手作り品の製作を行っています。

今回は、すてあーずの「モノづくり」についてご紹介したいと思います。

すてあーずがモノづくりの中で大切にしていることは、とてもシンプルです。障害のある人がつくったものだからこの程度でいい……ということではなく、私たちのつくったものを心から気に入ってもらいたいということです。

「安心して心地よく使ってほしい」

「本当に必要とされるものをつくり、届け、喜んでほしい」

すてあーずでは、このシンプルなことを何度も話し合い、考えながら、モノづくりと向き合っています。新製品のアイデアは、試作をし、できたものについて意見を出し合い、修正できることは修正し、よりよい製品にしていきます。販売を開始してから、お客様の意見を聞きながら、修正やバージョンアップを図ります。こういったモノづくりは、効率は良くないですが、量産にはない、

手づくりの価値があると考えています。私たちは自分たちのつくるものに誇りを持っています。それは「つくる」プロセスを大切にしているからです。だからこそ、1つ1つの作業工程に向き合い、丁寧に作り上げるのです。

私たちの思いを乗せた小物たちが、作り手と、手に取ってくれた人たちをつないでくれています。すてあーずの製品が、障害のある人と社会をつなぐ結び目となり、さらなる出会いが広がっていくことを思い描きながら、私たちは日々働いています。私たちが心を込めて作る「もの」たちをぜひ見に来てください。

＊すてあーずの商品は、こちらで販売しています！

- ・すてあーず：さいたま市見沼区南中野 844 - 22（JA 片柳支店様隣）
- ・minne：https://minne.com/@stairs-y
- ・おかしやマーブル（本誌 P12-13 参照）：埼玉県立小児医療センター2階
- ・福祉の店「パレット」：彩の国すこやかプラザ1階



IC カードケース ¥1,800 ノメ革使用。刻印を組み合わせで1つ1つデザイン。伸縮リール付きなので使いやすい◎



名刺入れ ¥2,500 ノメ革使用。仕切り付きで名刺を分けて収納可。



通園・通学グッズ（布地持ち込み：縫製代 ¥400 ~）通園通学先の指定サイズでおつくりします。



他にもペットボトルカバーやキーホルダーなど、多様な商品を販売中！

「ほっ」と一息,「くすっ」と 楽しめる空間を

浜本由里子さん

(特定非営利活動法人クッキープロジェクト
「おかし屋マーブル」店長)

埼玉県立小児医療センターの玄関を入ると、かわいいお店が目に入ってきます。2017（平成29）年1月にオープンした「おかし屋マーブル」には、クッキーやおせんべい、ユニークなデザインの雑貨、そして、やどかり農園の干し芋にすてあーずの革製品、時にエンジュ弁当などお馴染みの製品が並びます。そこでにこやかに迎えてくださるのが浜本さんです。

「探しているものは何ですか」

浜本さんは広島で生まれ、特にな



りたいものもなく働き始めて1年が過ぎた頃、「探しているものは何ですか」という募集フレーズに促されるように、長期ボランティアプログラムに参加しました。障害のある生徒も通う福岡の高校で1年間過ごし、そこで出会った人たちに刺激を受け、プログラムの最終研修先だった東京に留まることを決意。熱帯雨林を守る活動をしている非営利団体に関わるようになりました。

納得して支えてもらう価値

「そこで、大手企業が熱帯材を日本に輸入し、私たちが大量に消費する。それが、現地住民に深刻な影響を及ぼしていく状況に対して、手弁当で環境保護を訴え、活動する人たちの姿を初めて目の当たりにしました。やがて環境問題が世界的に注目されるようになると、行政や企業も態度を変え、助成金も活用できるようになる一方、本来の姿を



見失う団体もありました」。

「助成金をもらって活動することも大事だけれど、趣旨や活動に納得・賛同して会費をいただく、製品を買って支えてもらうということに大切な価値があると思う」と浜本さんは語ります。

埼玉との出会い

その後、「市民社会創造ファンド」（企業や個人からの寄付により社会ニーズに応じた助成プログラムの企画と助成実務を行うNPO）、埼玉大学でのインターンシッププログラム担当講師を経て、埼玉県内の団体と関わるようになりました。東日本大震災の時、避難場所となったさいたまスーパーアリーナでのボランティアを通じ、現在活動を共にする若尾明子さん（のちの特定非営利活動法人「クッキープロジェクト」代表理事）たちに出会い、「マーブル」で働くことになりました。

病院の中で笑顔のひとつときを

「マーブル」には、受診に来た子どもたちやご家族が訪れます。「診察は気の重いものだし、長い待ち時間にこちらに来られることもあるでしょう。束の間、気分を変える場所になれば」と浜本さん。「やどかり農園の干し芋は安全で子どもたちにも人気。エンジュ弁当は、子どもに

付きっきりのお母さんの病棟まで運べたらと思う」とも。

「おかし屋」には「お菓子」と、「funny（可笑しい）」の2つの意味があり、「マーブル」にはマーブル（大理石）模様のように、「障害のある人もない人も、病気の子どもも、働く大人たちもまざりあう」という意味が込められています。「夢はマーブル2号店。もっともっと色んな人が出会える場所があれば」。

「まぜこぜ」の社会へ、思いを馳せます。（記 永瀬恵美子）



特定非営利活動法人クッキープロジェクト「おかし屋マーブル」
さいたま市中央区新都心1-2
埼玉県立小児医療センター2階
TEL 048-853-3575
営業時間／10:00～17:00
定休日／土・日・祝日、年末年始

布ぞうりをつくるため

ご不要の「ゆかた」大募集！！



★店舗持ち込み歓迎！集荷応相談

★年代・柄・色 問いません

★しみ・汚れありでも OK!!

★大人用・子ども用、性別 問いません

★浴衣地反物でも OK!!

《問い合わせ・持ち込み先》

すてあーず（公益社団法人やどかりの里）

〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 844-22

（JA 片柳支店隣り）

TEL 048-688-8223

ご不要となった浴衣がありましたら、是非すてあーずへご寄付ください。

【エンジュ】配達パートさん大募集！

高齢者向け弁当宅配の配達パートさんを募集しています。軽自動車でご自宅または事業所に弁当をお届けする仕事です（さいたま市内）
曜日：月～金（祝日をのぞく）時給：880 円～
時間：（夕食配達）15:30 ～ 17:30



【お問い合わせ】

686-7875（永瀬）（月～金・祝日を除く、8:30 ～ 17:30 受付）

〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 286-1

こころの悩み、ちょっと話してみませんか…？

お住まいの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい

見沼区障害者生活支援センターやどかり

電話：048-682-1101

大宮区障害者生活支援センターやどかり

電話：048-795-4720

浦和区障害者生活支援センターやどかり

電話：048-793-6373

～精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です～



すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



い ち ず
とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000

FAX 048-854-3538

さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりにこだわった本格とうふ。宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910

FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。（一部商品を除く）

この道30年の職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉会では、貸詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています！ 問い合わせ先：048-854-6890（担当オガワ）

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL：048-854-6890 FAX：048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所（中央区） ●あざみ共同作業所（見沼区） ●そめや共同作業所（見沼区） ●きりしき共同作業所（中央区）
●さいたま障害者労働センター（橘川市）

《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●つばハイツ

●なつめホーム（以上、中央区） ●のぞみホーム（見沼区）

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢（以上、中央区）

●見沼区障害者生活支援センター来人（見沼区）

さいたま見沼よみさんぽ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／写真家。東日本大震災を機に「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花 Flowers of Fukushima」シリーズを制作。

全国各地での写真展開催のほか、病院や福祉施設などでの展示も手掛ける。また、2016年5月より国内就航を開始したANAの復興支援「東北FLOWER JET」の機体を福島や東北の花々でデザイン。全国に明るさを届けたいと活動を続けている。

野口勝宏オフィシャルサイト

<http://noguchi.photo>

表紙：ハナショウブ

梅雨の湿った空がこの花を際立たせます。この時期にしか見られないあでやかな花にため息をもらすのは、四季を持つ私たちが育んできた独特の感性のおかげでしょう。花菖蒲は江戸中期から江戸系、肥後系、伊勢系、長井系（山形県）と分派し現在では5,000種があると言われています。花卉の根元に黄色いとんがり模様があるのが花菖蒲。カキツバタは白。アヤメの場合は蝶のような網目模様になっているのが特徴です。同じ土を嫌うため、株分けや土を入れ替えての植え替えなど、花のあとの地道な手入れが次の年につながっていきます。

さいたま見沼よみさんぽ 第25号

発行 2018年5月

編集 「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

今年1年、よみさんぽでは「身近な生き物」に関するお話をお届けします。今号は「鳥」に注目しました。

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を行っています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

またこの度、広く地域情報をお届けするため「さいたま見沼よみさんぽ」と改題致しました。

「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員一同